

「疲れ度合い」5段階予測

あんサポ協 デジタコ トライアル版を開発

安全運行サポーター協議会あんサポ協議会、酒井一博会長、大原記念労働科学研究所所長は、トラック、バス、タクシーのドライバーを対象とした「体調予報」のα（トライアル）版を開発した。デジタコグラフィによる運転時



「実証実験で得た結果をフィードバックし、精度を高めたい」と酒井会長

10月から実証実験

1日開いた活動報告会で明らかにした。運行・健康管理機器のメーカー・ベンダー（供給者）、自動車運送事業者、学識経験者などで構成する同協議会は2015年度、トラック事業者をモデルにデジタコや睡眠中の脈波測定器（運行運転支援機器）、血圧計や体組成計など、日常の健康管

理機器のデータ測定の実証研究を実施。この結果、デジタコで日々取得できる運転時間、走行距離、拘束時間、荷物の積み込み・積み下ろし時間などの情報が、ドライバーの疲れ度合いと高い相関関係にあることが実証された。

疲れ度合いは①あまり疲れていない②少々疲れている③疲れている④かなり疲れている⑤非常に疲れている—に分類。デジタコ情報に、前回と前々回の運行でドライバーが感じた疲れ度合いを加味し、基礎データ（肥満度を示す体格指数であるBMIや睡眠状況など）を組み合わせたうえで、次回運行時の体調（疲れ度合い）を予測できる—としている。

実証研究では、運行前後での完全一致（的中）率は60%だが、「1が2」「4が3」など1段階の誤差を含めると98%に上っており、実証実験でより多くのドライバーのデータを測定することで、「更に精度を向上できる」（田中充・標準化ワーキンググループ主任）としている。

10月ごろから始める実証実験は、実証研究を経て構築した体調予報α版を運送事業者に実際に利用してもらい、更なる予測精度の向上を図ることを目的に実施

ドライバー健康チェック

眠り測定しデータ共有

安全運行サポーター協議会では1日の活動報告会で、プロドライバーの事故防止に向けた、健康・過労の総チェック・サポーターサービスの実施状況について報告した。

日々の運行管理での疑問や困り事、ドライバーの健康問題などを解決するワンストップ型の相談窓口開設

実施。早期の実用化につなげる。運行後の結果を踏まえ、運行管理者とドライバーのコミュニケーションツールとして活用することにも、精度向上のため、疲労度合いの主観情報の入力を求める方針だ。

α版の実証実験を経て、17年度にβ版にバージョンアップし、ドライバー1万人を対象に実施する。参加者は運行で予定する出庫前、休憩、作業時間などを出庫前の点呼時に入力する。

人規模での導入を目指す。更に、居眠り検知装置や血圧計などの効果検証も進め、18年度には「安全・健康管理プラットフォーム」の構築を目指す。同日の活動報告会で、酒井氏は「実証実験で得た結果をフィードバックし、精度を高めていきたい」と強調した。

善の取り組みに加え、運行管理者とデータを共有することで、業務シフトの調整などの対応ができるようになる。

またその健康チェックでは、10分程度のコルセンタリを通じて簡単な応答を行うことで、認知機能の変化のテストを受けられる。後日、利用者に認知症の前段階とされる軽度認知障害（MCI）の疑いの有無に関する評価レポートを郵送する。

同協議会のサイトから利用者が選択し、申し込む。1人当たり2700〜4千円で利用できる。

フリーチェックでは、パラマウントベッドの「眠りSCAN」を活用してドライバーの睡眠を1週間測定し、その分析結果を事業者にフィードバック。ドライバーの健康管理、睡眠改善を目的としている。（田中信也）

WGでは、サービスの更なる拡充に向けた実証研究を進めており、当面はパランスの取れた食事指導の提供を目指している。（田中信也）